

【研究ノート】

バーニー、ビョーク、日新丸

——芸術・音楽と捕鯨との関係をめぐる一考察——

浜 口 尚

はじめに

アメリカ人現代芸術家マシュー・バーニー (Matthew Barney) が製作・監督し、2005 年に公開された映画が『拘束のドローイング 9』(*Drawing Restraint 9*) である。バーニー自身と当時彼のパートナーであったアイスランドを代表する歌手・音楽家ビョーク (Björk) が主演を演じた本映画は、2004 年に日本の調査母船¹⁾日新丸の船上を中心に撮影されたもので、バーニーの視点から日本の捕鯨文化や捕鯨技術が解釈された異色の映像作品となっている。

以下、本稿においてはこの『拘束のドローイング 9』を素材にし、バーニーの芸術観、ビョークの世界観を参照点としながら、芸術・音楽と捕鯨との関係について、以下の手順で分析、考察する。

第 1 節においては、バーニーとビョークの略歴、主要作品を概略的に紹介する。

第 2 節では、映画『拘束のドローイング 9』の中で描写されている場面およびサウンド・トラック (映画音楽) 盤の歌詞から日本捕鯨に対するバーニーの考え方について検討する。また新たに入手した関係者の証言から映画撮影の背景を探究する。

第 3 節においては、ビョークの考え方の基本であるパンクの哲学を取り上げ、それが彼女の歌や活動に与えている影響を精査する。次にそれらを踏まえたうえで、ビョークの環境認識、捕鯨観を検討する。

第 4 節では、本稿を総括し、まとめとする。

本稿により、芸術・音楽と捕鯨との関係について認識を新たにし、北西太平洋や南極海において捕鯨にかかわってきた日新丸が現代芸術の制作舞台になっていたという歴史の一コマを再確認していただければ、筆者としては幸甚である。

1. バーニーとビョーク

本節においては、次節以下の理解に資するためにバーニーとビョークの略歴、主要作品について概説書、評論などを参考にして簡単に紹介する。

1967年にアメリカ合衆国カリフォルニア州サンフランシスコに生まれたバーニーは、7歳から高校卒業までの時期をアイダホ州で過ごし、その後コネティカット州のイエール大学に進学、同大学卒業後はニューヨークにおいて彫刻や映像作品などの創作活動に従事している（清水 2002: 47, 53；鈴木・舟越 2002: 56）。

バーニーの初期の創作活動において中心となったのが「拘束のドローイング」(Drawing Restraint) シリーズと「クレマスター・サイクル」(The Cremaster Cycle) である。拘束のドローイング・シリーズは身体的拘束の下で生まれる芸術作品が主要テーマとなっており、「拘束のドローイング 1」(1987年) から「拘束のドローイング 11」(2005年) までの11作品が製作されている（長谷川 2005a）。

その拘束のドローイング・シリーズの中核をなす作品が2004年に調査母船日新丸の船上で撮影され、2005年に公開された映画『拘束のドローイング 9』である。本作品は、金沢21世紀美術館において開催された「マシュー・バーニー：拘束のドローイング展」(2005年7月2日から8月25日) にあわせて製作・公開されたものである（浅井ほか 2005）。なお映画『拘束のドローイング 9』については、次節において詳細に論じる。

クレマスター・サイクルは「現代から未来にかけての生物学的な性から精神的な性にいたるまでのさまざまな人間のエロス」(鈴木・舟越 2002: 46) が主要テーマで、1994年から2002年にかけて、アイダホ州、ユタ州、ニューヨーク、イギリス領マン島、ブダペストを舞台にして「クレマスター 1」から「クレマスター 5」までの5映像作品が製作されている（清水 2002: 47；鈴木・舟越 2002: 46, 52）。

バーニーの比較的新しい映像作品としては、古代エジプトを舞台にしたノーマン・メラーの小説から着想を得て、アメリカ的特性と景観の中で精神的・肉体的・物質的な死と再生を三幕で描写したオペラ的な作品『リバー・オブ・ファンダメント』(*River of Fundament*) (2014年)²⁾、ギリシャ神話から着想を得て、アイダホ州の山岳地帯を舞台にライフル銃やオオカミなどが象徴する事象を通して現代アメリカが抱える諸問題（銃規制、野生動物保護など）を重層的に描いた作品『リダウト』(*Redoubt*) (2018年)³⁾などがある。

1965年にアイスランドの首都レイキャヴィクに生まれたビョークは1977年にアイスランドでデビュー・アルバムを発表、1979年からバンド活動を始め、その後ククル (Kukl)、シュガーキューブス (The Sugarcubes) などのバンドを経て、1993年にイギリスにおいてソロ・アルバム『デビュー』(*Debut*) を発表している（金子 2004: 16-18）。

以後、1995年『ポスト』(*Post*)、1997年『ホモジェニック』(*Homogenic*)、2000年『セルマソングス〜ミュージック・フロム・ダンサー・イン・ザ・ダーク』(*Selmasongs*)、2001年『ヴェスパタイン』(*Vespertine*)、2004年『メダラ』(*Medulla*)、2005年『ミュージック・フロム「拘束のドローイング 9」』(*The Music from Drawing Restraint 9*)、2007年『ヴォルタ』(*Volta*)、2011年『バイオフィリア』(*Biophilia*)、2015年『ヴァルニキュラ』(*Vulnicura*)、2017年『ユートピア』(*Utopia*) と数年に一作の割合でオリジナル・アルバムを発表している⁴⁾。

これらのアルバムのうち、本稿の主旨とかかわる『ミュージック・フロム「拘束のドロローイング9」』と『ヴォルタ』については、別途第2節と第3節において取り上げる。その他の作品について個別に批評することは筆者の力量を超えるので、評価は音楽評論家に委ねておきたい⁵⁾。

またビョークは新アルバムが発売されるのにあわせて世界ツアーに出るのを常としており、バンドの一員としてではなく、個人としては1994年の初公演以降、2017年のフジ・ロック・フェスティバル参加まで計9度来日し、日本武道館や大阪城ホールでもコンサートを行っている⁶⁾。

2000年にはラース・フォン・トリアー (Lars von Trier) 監督のミュージカル映画『ダンサー・イン・ザ・ダーク』 (*Dancer in the Dark*) に出演し、同年のカヌ国際映画祭では主演女優賞を獲得している (金子 2004: 19)。また2005年にはバーニーが製作・監督した『拘束のドロローイング9』にバーニーと共に出演している。なお両映画のサウンド・トラック盤はビョークが担当しており、前者のそれが『セルマソングス～ミュージック・フロム・ダンサー・イン・ザ・ダーク』、後者が『ミュージック・フロム「拘束のドロローイング9」』である。

以上のように、バーニーもビョークも過去30年以上にわたって、芸術界・音楽界において第一線で活躍している。なお余談ではあるが、バーニーとビョークは2000年頃からパートナー関係にあり、一子をもうけたが、2013年に別離している⁷⁾。

2. バーニーと日本捕鯨

マシュー・バーニーは1987年から「拘束のドロローイング」シリーズの製作を始めている。当初は体にゴム・ロープを結びつけて壁をよじのぼり、その壁の最上部に紙が置いてあり、そこにドロローイングを描くというような作品製作の方法を取っていた (清水 2002: 53)。彼は、身体に抵抗 (負荷) を与えることで筋肉が増強されるように、拘束自体が創造のエネルギーになるのではないかと考えていたのである (前田 2005: 46)。実際、バーニーはアスリートであり、イェール大学時代はアメリカンフットボールのクォーターバックとして活躍していた⁸⁾。アスリートとして自らの身体に繰り返し負荷を与えて鍛え上げた経験が、彼の芸術製作の過程に大きな影響を与えていたのである⁹⁾。

では、身体から負荷を取り除けばどうなるのであろうか。バーニーは、負荷がなくなれば身体はより官能的になり、ラブ・ストーリーにつながるだろうと考え、それを映像化したのが『拘束のドロローイング9』である¹⁰⁾。また彼は、ワックスやワセリンを材料にした彫刻の製作過程と鯨の解体過程にはその大きさや油の特質などに共通点があると考えており (前田 2005: 47)、鯨類の解体処理が行われる日新丸の甲板上を映画制作の場 (舞台) として選んでいる。

残念ながら、『拘束のドロローイング9』はDVDなどとして市販されていない。部分的にはユーチューブなどウェブ上で一瞥することは可能であるが、全編を通して鑑賞するためには、有償公開期間中に公式サイト上で鑑賞するか、あるいは折に触れて開催される上映会に参加するしかない。筆者はウェブ上で公開されている部分を参考にしたうえで、2022年8月30日に東京都

写真美術館ホールにおいて開催された上映会において全編を鑑賞した¹¹⁾。筆者が理解した範囲内での大要は次のとおりである¹²⁾。

映画は大きく分けて二つの物語が並行して展開していく。一つは日新丸の甲板上で型枠に嵌められて製作されたワセリンの造型物が最後に型枠をはずされ、拘束が解かれて形が崩れていくという映像記録であり、もう一つはバーニーとビョークが演じる西洋からの客人が日新丸上で出会い、茶会での婚礼の儀式を経て結ばれ、抱擁しあいながら、互いに包丁で相手の下肢部分の肉片を削ぎ、それを食しながら、鯨に転換していくという異色のラブ・ストーリーである。映画の要所要所には、バーニーが日本の伝統文化を表象するものとして考えている捕鯨、茶道、神道の構成要素が織り込まれているが、陳腐な日本趣味に陥っているわけでもない。またほぼ全編にわたりセリフがなく、解釈を鑑賞者に委ねている映画であった。

さて、その感想である。全編2時間15分の作品、「半分ほどで眠たさと退屈さに負けてしまう」(Martin 2006)というコメントもあったが、筆者は「親捕鯨」か、それとも「反捕鯨」か、どちらか見極めようと集中したので退屈しなかった。このような単純な二分法による分析は、芸術作品の解釈にはそぐわないということは重々承知しているが、南極海における日本の捕鯨を支えてきた日新丸上で映画撮影が行われたとあれば、筆者とすれば、そこを確認したかったのである。しかしながら、その結果は「親捕鯨」とも「反捕鯨」とも判断がつきにくかった。おそらくバーニーは捕鯨を抽象化することにより、「捕鯨の政治学」に巻き込まれることを巧みに回避していたのであろう。その点では確かに成功していた。

ほぼ全編セリフなしのこの映画で、唯一語りがあるのが、茶会場で亭主が日新丸の歴史を回想する場面である。そこでグリーンピースの船、アークティック・サンライズ号による日新丸への衝突についての言及がなされている。映画ではアークティック・サンライズ号がグリーンピースの船であるということには触れていなかったが、その事件を取り上げている点から判断すれば、少なくとも反捕鯨団体の暴力的な活動を批判的に捉えている作品であると言いうるのであろう。

その茶会場で亭主が日新丸の歴史を回想する場面は次のとおりである。日本文は亭主役の大島宗翠の語りを筆者が聞き書きしたもの、英文は字幕スーパーを筆者が転写したものである（この場面は1時間36分47秒開始、1時間37分57秒終了である）。

日新丸は、数年前、南方の海にて衝突による傷を負いました。その日は穏やかな日でした。〔中略〕ときにその日に起きたことは、忘れえない出来事でした。アークティック・サンライズというかつてのアザラシ漁の船が私たちの船と接触し、そして船の上にその跡を残したのです。

The Nisshin Maru bears the faint scar from an encounter some years ago in the Southern Ocean. It was a calm day. ...Yet, what happened that day left an indelible impression. A former sealing ship, the Arctic Sunrise, met with our vessel, leaving the memory of her bow on our starboard side.

この衝突事件については、第13次南極海鯨類捕獲調査（1999–2000年）の調査団長として日新丸に乗り組んでいた石川創が次のように記録している。

AS [アークティック・サンライズ] 号を調査母船日新丸の舷側数メートルまでに接近して併走したあげくに、船首左舷を日新丸の右舷船尾に衝突させてしまった。この年、調査団長として日新丸に乗り組んでいた私は、目前でこの事故の瞬間を見ていたのだが、このときの衝突は明らかに AS 号の操船ミスである。[中略] しかしグリーンピースはただちに「日新丸が AS 号に突進してきて衝突した」と世界に宣伝し [た]。(石川 2011: 168)¹³⁾

この第13次南極海鯨類捕獲調査以降、グリーンピースによる鯨類捕獲調査事業への妨害活動は激しさを増し、『拘束のドローイング9』が公開された2005年度に実施された第19次南極海鯨類捕獲調査（2005–2006年）では、アークティック・サンライズ号が日新丸右舷に突き刺さるよう衝突する事件を引き起こすのである。その現場は写真撮影され、明白な証拠として記録されている（石川 2011: 172 図52）。



図1 日新丸（2005–2006年漁期、南極海）
（写真提供：一般財団法人 日本鯨類研究所）

それにしても、反捕鯨団体から攻撃的になっていた日新丸での映画撮影がよく可能となったものである。以下、その経緯、背景などを探っていく。

バーニーが日新丸を舞台にして『拘束のドローイング9』を製作するきっかけとなったのが、金沢21世紀美術館による「マシュー・バーニー：拘束のドローイング展」（2005年7月2日から8月25日）の開催であった。同展の企画を担当した長谷川裕子（2004年、2005年金沢21世紀美術館学芸課長・芸術監督、2021年4月同館館長¹⁴⁾）によれば、2002年に作品構想が持ち上が

り、2005年に完成している（長谷川 2013: 47）。

バーニーは製作準備のため来日し、捕鯨実施地域を訪れ、日本捕鯨の歴史と伝統について学んでいる（猪野 2005: 30）。そのうえで長谷川と何度も打ち合わせを行い、水産庁に手紙を書き、シナリオを書き続けた結果、最終的に水産庁担当者の興味を引き寄せ、撮影が可能となったとのことである（チェン 2005: 49）。

長谷川はバーニーを連れて水産庁に赴き、「この方は若いですが、ミケランジェロに匹敵するアメリカの偉大な彫刻家で、船の上で彫刻を制作し、これを映画に撮ろうとされています」（長谷川 2013: 51）と担当者を説得し、日新丸の使用について同意を得たとのことである。彼女の記録によれば、2004年6月に日新丸での撮影許可が下り、同年10月28日にキャッチャーボート勇新丸、11月5日から9日に日新丸での撮影を行っている（長谷川 2005c: 67）。

ところで、日新丸は民間の共同船舶株式会社（以下、「共船」と表記）が所有する船舶である。その船舶上での映画撮影に水産庁の許可（同意）が必要というのは奇異に思えるかもしれない。その当りの事情を簡単に説明しておく。鯨類捕獲調査は『国際捕鯨取締条約』（*International Convention for the Regulation of Whaling*）第8条第1項および第2項¹⁵⁾に基づき、日本国政府が特別許可書を発給し、財団法人（現在の一般財団法人）日本鯨類研究所（以下、「鯨研」と表記）が事業実施していた。鯨研は鯨類捕獲調査の実施に際し、用船料を支払って、共船から船舶および乗員の提供を受けていた。鯨研の収入は鯨類捕獲調査の副産物（鯨肉、脂皮など）の売上げと水産庁からの補助金および委託金であり、一方共船の収入の80%は鯨研からの用船料と鯨産物の卸売り手数料が占めていた（石井 2011: 43）。従って、鯨類捕獲調査が実施されなければ、共船の収入の大半が断たれてしまうのである。そのため、共船は水産庁の意向を無視できなかったのである。なお、本件説明は映画撮影された当時（2004年）前後の状況を述べたものであり、日本が『国際捕鯨取締条約』から脱退し、商業捕鯨を再開した2019年7月以降にはあてはまらないことを付記しておく。

日新丸での映画撮影に許可が下りた2004年6月当時、日本の捕鯨政策の中心にいたのが小松正之水産庁漁場資源課長兼国際捕鯨委員会日本国政府代表代理（2021年現在、一般社団法人生態系総合研究所代表理事）である。その小松は映像記録化されたインタビューにおいて、バーニーとビョークについて次のように語っている。

このマシュー・バーニーの企画について電話があり、彼が著名な美術家と聞きました。ピカソのように。ピカソは知っているが、マシューは知らない。次にビョークの名が出て、それも知らない。有名な歌手ですが。結局、何の企画か分からない。アートを理解できる人は希で、その人が有名と聞けば、私などは信じてしまいます¹⁶⁾。

国際捕鯨委員会年次会議の場における小松の反捕鯨国相手に一歩も譲らない交渉姿勢は有名であり、筆者もグレナダで開催された第51回年次会議（1999年）と下関で開催された第54回年

次会議（2002年）において、小松の強靱さを目の当たりにしている（浜口 2016: 68–69, 74–75. 参照）。そのタフ・ネゴシエーターが意外にあっさりと映画撮影を容認したように受け取れる。実際はどうであったのだろうか。小松は日新丸上での映画撮影容認の経緯とその背景について筆者に次のように説明してくれた。

日新丸は民間の共船の船なので、操業に支障がない限り、撮影は可能と考え、了解した。上司の決裁などは取りようがないので、個人の責任で了解した。了解した理由の一つは、バーニーが従来とは違った視点で捕鯨を取り上げてくれるのではないかと期待したからである¹⁷⁾。

では、日新丸を所有していた共船はどうであったのだろうか。忙しい業務の合間（実際、撮影終了の3日後に日新丸は南極海に向けて出港している）に快く撮影に応じられたのであろうか。映画撮影当時（2004年10月、11月）、共船を率いていたのが山村和夫代表取締役社長（2021年現在、一般社団法人日本捕鯨協会理事長）である。その山村は映画撮影をめぐる事情とその影響について筆者に次のように語ってくれた。

バーニー側が水産庁の了解を得たので、共船としては芸術製作の場として「船」を提供した。当初は映画撮影されるとは考えていなかった。あくまでも芸術製作の場として「船」を提供したとの認識である。公開された映画は見えていないし、映画が共船の事業に直接的な影響を与えることもなかった¹⁸⁾。

上述した関係者の話を総合すれば、バーニーがミケランジェロやピカソに匹敵する著名な現代芸術家であるということから信頼され、日新丸上において芸術制作・映画撮影がなされたと理解しうるのである。実際、バーニーはその信頼を裏切らなかった（と思う）。

日本捕鯨が作品の重要な構成要素の一つであるが、バーニーらによって実際の捕鯨や実物の鯨は撮影されていない。キャッチャーボートからの爆発銃の発射場面はあるが、鯨が銃撃ちされるわけではなく、龍涎香を模した電柱のようなものが銃撃ちされ、引き揚げられるだけである。血は一滴も流れていない。乗組員が食している鯨肉料理らしきものも実物とは程遠いシュールな映像となっている。

小松が期待したとおりにバーニーは「従来とは違った視点で捕鯨を取り上げてくれ」た。但し、それは筆者を含めて普段から捕鯨文化および捕鯨問題にかかわってきた者からすれば、理解しにくい（あるいは理解を超えた）捕鯨の姿であった。少なくとも反捕鯨団体がその宣伝活動に使いうるような代物ではなかったのである。

その映画『拘束のドローイング9』のサウンド・トラック盤がビョークの『ミュージック・フロム「拘束のドローイング9」』である¹⁹⁾。本作には全11曲収録されており、1曲目が映画の冒

頭で使用されている「グラティテュード」(“Gratitude”)である。同曲の歌詞は、第二次世界大戦後の日本の食料危機を救済するために、マッカーサーが捕鯨を解禁したという史実に基づいて、バーニーが創作したものである(猪野 2005: 30)。作曲はビョークである。その歌詞は非常に興味深い内容なので、以下に掲げておく。

Recently, fulfilling your heart's desire
You removed the whaling moratorium.
Your gesture brings a much needed food
To our community and families.

先日、かねてよりのご希望でありました通り
あなたさまは捕鯨の一時停止を解除してくださいました。
あなたさまのご指示のお陰で、私たちの地域社会とそこに暮らす家族たちは
何より必要な食糧を得ることができたのです²⁰⁾。



図2 ビョーク『ミュージック・フロム「拘束のドロイング9」』(CD)

バーニーが反捕鯨側に与するのであるならば、わざわざアメリカ人マッカーサーが日本捕鯨の再興を手助けしたことなどは取りあげなかったであろう。彼が日本の捕鯨史をある程度正確に理解していたからこそ、この歌詞を創作できたのである。

一方、ビョークは原爆を落として日本人を殺戮したマッカーサーが、日本人を飢えから救うために捕鯨再開を許可し、その結果、日本人が飢えから救済され、日本人がマッカーサーに感謝していることに驚き、不思議がっている²¹⁾。このようなビョークの見解から彼女が日本の捕鯨(あるいは捕鯨一般)について、どのように考えているのかを読み取るのは難しい。次節においては独自の考えをもつビョークの世界観を取り上げる。

3. パンクの歌姫ビョークの世界

ビョークの生き方の基本にはパンクの哲学がある。比較的最近（2016年、2017年）のインタビューにおいて、ほぼ同じ内容の考え方を語っている。

パンクは私が成長してきた土壌であり、それは他人を頼るながすべてであった。物事は自分自身でやれ。責任を取れ。物事が起こるのを待つな。自分自身で物事を引き起こせ。私が年をとるにつれて、パンクの哲学から成長してきたこの責任感という感覚がより強くなった。(Guðbrandsdóttir 2016)

私の母は1946年生まれの子 hippie 世代。何事にもネガティブで、ラディカルすぎる、と子供の頃の私は思っていた。〔中略〕私の世代、パンク世代は、もう話はたくさん、“Just Do It”（行動せよ）という世代だった。だから私も20～30年、そうしてきた。(小野島 2017: 39)

筋金入りの hippie であった母の下、すべてが紫色に塗られている hippie のコミュニティで、一日中ジミ・ヘンドリックスの音楽を聴きながら²²⁾、働くことを嫌っている7人の大人に育てられてきたビョークには、「hippie 的なものの90%はクソのようなもの」という hippie の負の側面しか記憶に残っていない (Sharkey 1995)。実際にはベトナム反戦運動など hippie 的思考とロック・ミュージックが結びつき、社会変革をめざした運動もあり (浜口 2021: 149–153. 参照)、その多くが成功しなかったにせよ、のちの文化や思想に大きな影響を与えたのは事実である。それだからこそ筆者（1955年生まれ、長髪、ひげ面）は本稿を執筆しているのである。

1975年11月にデビュー・ライブを行い、1976年11月にファースト・シングル「アナキー・イン・ザ・U.K.」(“Anarchy in the U.K.”) を発売したセックス・ピストルズ (Sex Pistols) をパンク・ロックの嚆矢とするならば (大鷹 2016: 23, 26)、1965年生まれで1979年よりバンド活動を始めたビョークはまさしくパンク世代である。

1984年に当時ビョークが在籍していたバンド、ククルのレコードをイギリスで発売したが、パンク・ロック・バンドが設立した独立系のレコード会社であり、ククルの後、ビョークが参加したシュガーキューブスが1987年にイギリスで契約したのも別のパンク・ロック・バンドのメンバーが設立した独立系のレコード会社であった (McDonnell 2001: 16; 行川 2007: 272, 292)。シュガーキューブス解散後、ソロ活動を始めたビョークであるが、その後も少なくともイギリスにおいては、2022年8月末時点で最新作にあたる『ユートピア』(2017年)までシュガーキューブス時代と同じ独立系のレコード会社から30年以上LP、CD、DVD等を発売し続けている。その代わりにパンクとしてのビョークの矜持があるのかもしれない。

かつてウドヴィッチはビョークを「元パンクの歌姫」(punk-turned-diva) (Udovitch 1995) と称したが、筆者に言わせれば「現役パンクの歌姫」である。だからこそ社会的にも影響力があるのである。元大統領、元首相、あるいは元教授など、なんでも「元」がつけば、値打ちは下がる。1943年生まれのミック・ジャガー (Mick Jagger) も現役だからこそ、ロック・アーティストとして存在感があるのであって、引退すれば、単なる後期高齢者の一人にすぎないのである。

さて、その現役パンクの歌姫ビョークは、現役だけに時々突飛な発言や行動で物議を醸すことがある。実際のところ、それらの発言や行動が意図的(確信犯的)なのか、それとも単なる思いつきなのか、よくわからない部分もある。以下、ビョークの音楽を題材にして、ビョークの世界を考えていく。



図3 ビョーク『ヴォルタ』(CD)

2007年に発売されたビョークの作品に『ヴォルタ』がある²³⁾。CDを収容している紙製ケースの表面が観音開きになっていて、それをビョークのシールで封印してある(図3)。中のCDを聴くためにはそのシールを剥がす必要があり、剥がせば元に戻せない。収集家泣かせのCDであった。その『ヴォルタ』からシングル・カット(古い表現!)された一曲が「ディクレア・インデペンデンス」(“Declare Independence”)である。本曲の作詞がビョークで、もともとはデンマーク王国内の自治領グリーンランドとフェロー諸島に捧げられたものであった²⁴⁾。ビョークの故国アイスランドもかつてはデンマーク王国領であった。同曲の歌詞は次のとおりである²⁵⁾。

Declare independence / 独立を宣言しろ

Don't let them do that to you / 植民者に勝手にさせるな

Start your own currency / 通貨を発行し

Make your own stamp / 切手を作り

Protect your language / 母語を守れ

Make your own flag / 国旗を作り

Raise your flag (higher, higher) / 高く、高く、掲げよう

Damn Colonists / 植民者をやっつけろ
Ignore their patronizing / 恩着せがましさを無視し
Tear off their blindfolds / 目隠しを引き裂き
Open their eyes / 奴らにわからせろ

随分勇ましい歌詞である。2008年に実施された彼女の世界ツアーにおいて、本曲が各地で騒動を引き起こした²⁶⁾。上海でのコンサートにおいては本曲演奏中に「チベット、チベット」と連呼し、公演終了後に批判が殺到した。東京での2回のコンサートにおいても「コソボ、コソボ」と叫び、コソボ共和国の独立宣言支持を表明し、のちのセルビアでのコンサートは主催者判断で取り消された。オーストラリアのコンサートでは同曲はアボリジニーに捧げられた。さらに2014年、スコットランドで独立にかかる住民投票が近づいている時期に「ディクレア・インデペンデンス」をスコットランド人民に捧げる旨をフェイスブックに投稿し、また2017年、カタロニアの独立にかかる住民投票時にはツイッターで同曲をカタロニアに捧げた²⁷⁾。

中国での騒動に関してビョークは「私の反逆性以上に、中国〔政府、人〕が過敏であっただけ。デンマークにおいて、グリーンランドとフェロー諸島に言及した時には一つの不満もなかった。上海では、ほとんどの人々が共感する感情を伝えたにすぎない」(McNair 2008)と述べている。デンマーク王国内の自治領として大幅な自治が認められているグリーンランドおよびフェロー諸島（たとえば、デンマーク王国は反捕鯨国であるが、これら二自治領では捕鯨が実施されている(高橋 2009: 43)）とチベット人には域内移動の自由もないチベット自治区(渡辺 2013: 203)を同じ枠組みで取り扱うなど彼女の国際政治感覚の乏しさは明らかである。

またビョークは2008年の来日以前に6度来日し、コンサートを実施している²⁸⁾。その気で勉強したならば、日本にも先住民問題が存在することを認識できたはずである。セルビア共和国コソボ自治州が独立宣言をしたのが2008年2月17日であり(小窪 2008)、東京でのコンサートが2月19日、22日であったため、ここぞとばかりにコソボ共和国の独立宣言支持を表明したと思われるが、東京は場違いであった。本気でコソボ共和国を支援するのであるならば、少なくともヨーロッパ諸国内でやるべきであった。現役パンクとして過激になるのは結構なことだが、もう少し国際政治感覚を研ぎ澄ませてほしいものである。

少数民族問題・先住民問題にかかわる活動においては、多少感覚がずれているビョークであるが、故国アイスランドの自然保護・環境保護活動においては、実態を踏まえた地に足のついた活動を行っている。アイスランドにおいてアルミニウム精錬所を操業しているアメリカ系メジャー会社とイギリス＝オーストラリア系メジャー会社が精錬所の新設および増設を計画した際には、それらの施設はアイスランドの原初の自然、温泉、溶岩台地に損害を与えるとして新增設に反対するコンサートを開催している(Kanter 2008; Magnússon 2010)。

またカナダのエネルギー会社がアイスランドの地熱発電会社を買収した際には、ビョークはその経緯が不明瞭であるので調査を実施するように求めている²⁹⁾。本件については、政府の調査委

員会が買収は合法であるとの判断を下したが³⁰⁾、結局カナダのエネルギー会社は取得した株式(全株式の98.5%)のうち25%をアイスランドの年金基金の連合体に売却、さらに同連合体に持ち株比率を33.4%まで増加できる選択権を付し、加えて取締役を選任できる権限と重要な決議に参画できる権限を同連合体に付与することで決着している(Andersen 2010; Magnússon 2011)。

この結果、アイスランドの地熱エネルギーという自然資源が外国資本に完全に支配されることは防止できた。そこにどの程度までビョークの活動が直接影響を与えたのかは不明であるが、少なくともメディアを通して、一連の動きに世間の注目を引きつけ、買収の抑止力になったのは確かである。

このようにアイスランドの自然保護・環境保護活動に積極的にかかわってきたビョークであるが、同国の捕鯨についてはほとんど発言していない。筆者は本稿の執筆に際して、1989年から2022年までのビョーク関連インタビュー記事を130編ほど読んだが、ビョークが捕鯨に直接言及していたのは2009年7月に受けたインタビューだけであった。少々長くなるが、前後を含めて引用しておく。

現在アイスランドにおいては、左派も右派も、環境保護派もそうでない人々も、多くの人々が国民集会(a national assembly)と呼べるようなものを作り出すことに関心がある。アイスランドの人口30万人のうちの1500人ぐらいが集まり、今後20年間ぐらいの私たちが望むアイスランドの姿を描き出したい。すべてのものを利用し、どこにでもダムを作ることを望む人々、いかなるものも利用することを望まない人々、アイスランドが世界最大の電気自動車国になることを望む人々、もっと鯨を捕ることを望む人々、などからなる国民集会である。[中略]そこには意見の異なる諸集団があり、その多くはほとんどの事象において私たちは相いれない。しかしながら、これら諸集団が一緒に働くことが国民集会の第一歩である。私たちにそれができるかどうかはわからないが、それに参加することが夢である。これが、私たちが抱いている一つの夢である。(Magnússon 2009) [下線筆者]

このインタビューは、アイスランド政治史上で初めて左派=中道左派連立政権が誕生してから3か月後に行われたものであり³¹⁾、ビョークの連立政権への期待、直接民主主義のようなものへの夢を読み取ることはできるが、彼女自身の捕鯨についての考え方は明確ではない。アイスランドにおいて、2008年にはミンククジラ38頭、2009年はナガスクジラ125頭とミンククジラ81頭が捕殺されており(浜口 2019: 36 表1)、同国国内にそれ以上の鯨類捕殺を望む人々が存在することとビョークはそれを支持しないことがわかるだけである。

唯一、ビョーク自身の捕鯨についての考え方が比較的明確に表れていると思われるのが、アメリカのロック・バンド、ダーティー・プロジェクターズ(Dirty Projectors、以下「DP」と表記)とビョークの共同作品『マウント・ウィッテンバーグ・オルカ』(Mount Wittenberg Orca)³²⁾である。同作品は2010年にEP、2011年にCDが発売されている³³⁾。

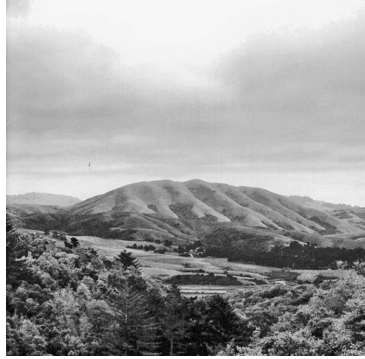


図4 Dirty Projectors+Björk, *Mount Wittenberg Orca* (CD)

『マウント・ウィッテンバーグ・オルカ』収録の全7曲はDPの中心人物、デヴィッド・ロングストレス (David Longstreth) の作品である。DPのメンバー1人がサンフランシスコの北にあるウィッテンバーグ山の尾根を歩きながら太平洋を眺めていた時、母鯨と3頭の仔鯨が北に回遊していくのを目撃、その体験談を題材にしたものである³⁴⁾。全体としては母鯨の仔鯨に対する愛情のこまやかさや環境認識の鋭敏さ、人間の行為の愚かさなどが歌われており、そのうちの1曲「シェアリング・オーブ」(“Sharing Orb”)には、以下の歌詞が含まれている³⁵⁾。

How do you say love?

Your love is a harpoon that seeks my blood.

Never enough,

Your weapons, your noises buzzing in my skull.

They drive me upward into the deadly light.

あなたは愛をどういうふうに言うのですか。

あなたの愛とは私の血を求める鉅です。

あなたは十分というものを知りません。

あなたの武器や騒音が私の頭蓋骨の中でうなり立てて、

私を海の上へ、死の光の中へと追い立てる。

メキシコ半島からカリフォルニア州沖を経て北極海まで回遊していくコククジラは、かつてアメリカ合衆国においても商業捕鯨の対象となっており、この曲は捕殺されていたコククジラを歌ったものである。明らかに反捕鯨の歌である。他者の作品ではあるが、ビョークも歌手として参加している。その歌詞の意味するところ(反捕鯨の内容)は十分認識していたはずである。

また『マウント・ウィッテンバーグ・オルカ』からの収益はナショナル・ジオグラフィック協会（National Geographic Society）の国際的な海洋保護区の創設をめざす構想に寄付されることになっている³⁶）。同協会の海洋保護区構想についての詳細は把握していないが、一般的に海洋保護区内での捕鯨はありえない。これらのことを敷衍すれば、ビョークも反捕鯨活動に一定の理解を示していることがわかるのである。但し、筆者としては捕鯨に関してほとんど自己主張しないビョークの真意を量りかねているのが正直なところである。

4. 芸術・音楽から考えた捕鯨（まとめ）

本稿において考察した結果は次のとおりである。

アメリカ人現代芸術家マシュー・バーニーは自らの芸術制作経験を踏まえたうえで、日本における捕鯨の歴史、文化、伝統を現地において学び、それらを独自の視点から解釈し、調査母船日新丸を舞台にして『拘束のドローイング9』として映画化した。その芸術的評価については、門外漢である筆者には難しいが、少なくとも日本捕鯨の理解への新視点、すなわち芸術として捕鯨を捉える視点を提供したことは確かである。また日新丸に故意に衝突した反捕鯨団体の悪質行為についてもバーニーは正しく認識し、映画の中で第三者の言葉を通して適切に表現している。これらの点を総合すれば、『拘束のドローイング9』は日本捕鯨を肯定的に捉えている作品として理解できるのである。加えて、反捕鯨団体による日新丸への暴力行為が激化していた時期に、日新丸での映画撮影を了承し、協力支援した日本側関係者の英断も評価に値するものであった。

一方、映画『拘束のドローイング9』に出演し、またサウンド・トラック盤も製作したアイスランド人歌手・音楽家ビョークについては、その歌詞や音楽活動の分析から、パンクの哲学を土台とする独自の世界観をもっていることが理解できた。故国アイスランドにおいて自然保護・環境保護活動には積極的にかかわっているが、捕鯨への賛否についてはそれほど明確ではなかった。他アーティストとの共同作品の中にビョークの反捕鯨の姿勢を読み取ることも可能ではあるが、それを強く主張しているわけでもない。現役パンクの歌姫として関心のある問題について強く自己主張するビョークとしては、捕鯨に関してほとんど発言していないのが不思議であった。ビョークの捕鯨に対する真意については、引き続き追究していきたい。

現時点（2022年）で回顧してみれば、『拘束のドローイング9』が捕鯨従事者、捕鯨に関する世論、反捕鯨団体などに大きな影響を与えたわけではなかった。しかしながら、北西太平洋や南極海において長年にわたり捕鯨にかかわってきた日新丸に現代芸術の最先端と触れ合った一時期があったという事実は重要であり、そのことをここに記録し、記憶にとどめておきたい。

おわりに

新型コロナウイルスによる感染症の拡大が世界に多大な影響を与えてきた。その結果、芸術

家・音楽家の活動も中止や延期を余儀なくされている。本稿で取り上げたバーニーやビョークについても同様である。以下、二人関連の情報を記しておく。

まずはバーニーである。2020年2月29日から3月15日に東京都写真美術館において、バーニーの映画『リダウト』、『クレマスター』（5作品）、『拘束のドローイング9』の上映会が予定されていたが延期となり³⁷⁾、改めて2022年8月16日から9月4日の日程で開催されている³⁸⁾。また2005年に「マシュー・バーニー：拘束のドローイング展」を開催した金沢21世紀美術館においては、『拘束のドローイング9』の制作展示を回顧するような形で「特別展示：マシュー・バーニー」（2022年5月21日から9月11日）が開催されている³⁹⁾。あわせて、同特別展を記念して、金沢21世紀美術館シアター21において、2022年9月10日に「『拘束のドローイング9』特別上映会」が開催されている⁴⁰⁾。

一方、ビョークも少しずつ活動を再開させている。7度延期されてきたアイスランド、レイキヤヴィクにおけるビョークの4回連続コンサートは2021年10月11日から開始され、国営テレビ・ラジオでの同時中継、インターネット配信もなされている（Ćirić 2021）。また皮肉なことではあるが、感染症の拡大による都市封鎖は、ビョークに新アルバムの構想、制作に十分な時間を与えたようであり、2022年秋、5年ぶりの新アルバム『フォソーラ』（*Fossora*）が発売される（Kyzer 2022; Ravens 2022）。加えて、この新アルバムの発表にあわせる形で、2023年3月下旬に来日し、東京で3回、神戸で1回のコンサートが予定されている⁴¹⁾。バーニー、ビョークともコロナ禍を乗り越えて、活動の幅を広げているようである。

最後に日新丸を取り上げる。2021年12月21日、日新丸を所有する共同船舶株式会社は新捕鯨母船の建造計画を発表した。南極海までの航行能力をもつ新船は2022年9月に起工し、2024年3月に竣工、同年から操業予定である⁴²⁾。

現在（2022年）稼働中の捕鯨母船日新丸は、1987年に遠洋トロール漁船築前丸として竣工し、1991年に調査母船に改装されたものである（小島 2003: 14）。その後、1998年のオーストラリア東岸沖サンゴ海での火災事故（小島 2003）、1999–2000年漁期の反捕鯨団体による悪質な衝突をはじめとする5回の衝突事件（石川 2011: 165 表5）などの不幸な事故、事件を乗り越えて2018–2019年漁期まで調査母船としてその職責を果たしてきた。商業捕鯨が再開された2019年7月以降は、民間の捕鯨母船として鯨類資源の持続的利用に貢献している。鯨類捕獲調査期間中に『拘束のドローイング9』の撮影舞台となったことは本稿において取り上げたとおりである。日本捕鯨の諸局面にかかわってきた日新丸にも退役の時期が近づいてきたようである。最後まで安心・安全な操業を続けてもらいたい。

新母船にはナガスクジラを揚鯨、解体処理する能力も備わっているとのことである⁴³⁾。2018年7月にアイスランドにおいてナガスクジラの陸揚げを観察してきた筆者としては（Hamaguchi 2021: 38 photo 4）、遠からず日本の排他的経済水域内においてナガスクジラが捕殺されること、そしてその肉が自宅で食べられることを期待して本稿を終えたい。

謝辞

本稿の執筆に際して、石川創さん（株式会社大阪海洋研究所）、小松正之さん（一般社団法人生態系総合研究所）、山村和夫さん（一般社団法人日本捕鯨協会）にはお忙しい中、面談に応じていただき、貴重な情報を提供していただきました。記してお礼申し上げます。また石川さんには本稿の草稿に対していいなコメントをいただきました。あわせてお礼申し上げます。

注

- 1) 調査母船とは、鯨類捕獲調査（いわゆる調査捕鯨）を実施する捕鯨母船のことである。
- 2) The official website for “River of Fundament.” <http://www.riveroffundament.net/> (accessed February 25, 2022).
- 3) 筆者は『リダウト』を注11)に記載した上映会（2022年8月31日）において鑑賞した。本作品は全編セリフなしのため、鑑賞に際しては、トモ・スズキ・ジャパン「【キーワード集】マシュー・バーニーの最新フィルム作品『リダウト』(2018)」https://www.tomosuzuki.com/post/redoubt_glossary（2022年7月16日閲覧）を参考にした。
- 4) ウィキペディア「ビョーク」<https://ja.wikipedia.org/wiki/ビョーク>（2021年7月4日閲覧）。
- 5) 『デビュー』（1993年）から『ヴェスパタイン』（2001年）までの5作品については、新谷洋子による詳細な解説（新谷 2002）がある。また『メダラ』（2004年）から『ヴォルタ』（2007年）までの3作品については石川真一ほかの批評（石川ほか 2007）、『バイオフィリア』（2011年）と『ヴァルニキュラ』（2015年）については坂本哲哉の批評（坂本 2017）、『ユートピア』（2017年）についてはCD（ホステス・エンターテインメント、HSE-6486）（筆者所有）所収の新谷洋子によるライナーノーツが参考になる。
- 6) 注4) および小野島大のビョークへのインタビュー（小野島 2017）による。
- 7) 注4) およびマクドネル（McDonnell）によるビョーク論（McDonnell 2001: 90）による。
- 8) 『拘束のドロワーイング9』の撮影現場を中心にして製作されたアリソン・チャーニック（Alison Chernick）監督のドキュメンタリー映画『マシュー・バーニー：拘束なし』（*Matthew Barney: No Restraint*）（DVD版、2009年、コロビアミュージックエンターテインメント、COBM-5614）（筆者所有）の中にイェール大学のクォーターバックとしてタッチダウン・パスを決めたバーニーの姿が収録されている（19分27秒開始、同51秒終了）。また『拘束のドロワーイング9』を含めてバーニー作品の撮影監督を務めているピーター・ストリートマン（Peter Strietmann）も学生時代はアメリカンフットボールの選手（ラインバッカー）で、バーニーと対戦した時、彼にトリプル・オブションからのランでタッチダウンを決められたと語っている（猪野・伴野 2005: 62）。バーニーはランもパスもできる一流のクォーターバックであった。
- 9) バーニーは大学時代に三島由紀夫の『太陽と鉄』を読み、重要な影響を受けたと語っている（チェン 2005: 52）。「苦痛とは、ともすると肉体における意識の唯一の保証であり、意識の唯一の肉体的表現であるかもしれない。筋肉が具わり、力が具わるにつれて、私の裡には、徐々に、積極的な受苦の傾向が芽生え、肉体的苦痛に対する関心が深まって来ていた」（三島 2020: 41）などの表現がバーニーの肉体改造と精神面に影響を与えたのかもしれない。
- 10) 注8)に記載した『マシュー・バーニー：拘束なし』（DVD版）所収のリーフレット「マシュー・バーニー『拘束のドロワーイング9』インタビュー」による。
- 11) トモ・スズキ・ジャパン主催「マシュー・バーニー特集上映『リダウト』プラス」（2022年8月16日から9月4日）。本興行では、会期中にバーニーの作品『リダウト』が17回、『クレマスタール』（5作品）が3回、『拘束のドロワーイング9』が3回、他者による4作品が3回、上映される。<https://www.tomosuzuki.com/post/redoubtreturn5>（2022年8月30日閲覧）。
- 12) 本大要の作成に際して、長谷川祐子と野々村文宏による『拘束のドロワーイング9』の解説（長谷川 2005b: 43；野々村 2008: 151）を参考にした。

- 13) 筆者は2021年8月3日に石川創・元調査団長（2021年現在、株式会社大阪海洋研究所）と面談し、本件衝突事件を再確認している。また『拘束のドロ잉9』の撮影に関連するお話、同映画の感想などもお伺いした。
- 14) 長谷川裕子の経歴についてはウィキペディアによる。<https://ja.wikipedia.org/wiki/長谷川祐子>（2021年8月5日閲覧）。
- 15) 『国際捕鯨取締条約』第8条第1項「この条約の規定にかかわらず、締約政府は、同政府が適当と認める数の制限及び他の条件に従って自国民のいずれかが科学的研究のために鯨を捕獲し、殺し、及び処理することを認可する特別許可書をこれに与えることができる。また、この条の規定による鯨の捕獲、殺害及び処理は、この条約の適用から除外する。〔後略〕」、第2項「前記の特別許可書に基づいて捕獲した鯨は、実行可能な限り加工し、また、取得金は、許可を与えた政府の発給した指令書に従って処分しなければならない。」（水産庁 1995: 12）
- 16) 注8)に記載した『マシュー・バーニー：拘束なし』（DVD版）において、小松が英語でインタビューに答えている部分（11分37秒開始、12分23秒終了）の日本語字幕スーパーを筆者が書き写したものの。
- 17) 筆者は2021年10月22日に小松正之・一般社団法人生態系総合研究所代表理事と面談し、映画撮影に関連する諸事情をお伺いした。
- 18) 筆者は2021年11月11日に山村和夫・一般社団法人日本捕鯨協会理事長と面談し、映画撮影に関連する諸事情をお伺いした。
- 19) ビョーク『ミュージック・フロム「拘束のドロ잉9」』（2005年、ユニバーサルミュージック、UICP-1062）。筆者所有。
- 20) 英文歌詞はCD（注19）所収のライナーノーツ、和訳は田村亜紀による。なお「食糧」という語句は田村の和訳文どおりに用いた。筆者としては、「食糧」は主食を意味するので、主食以外の食べ物を表す「食料」がふさわしいと考えている。
- 21) “Spotlight on Björk.” *Iceland Review*, August 10, 2005. <https://www.icelandreview.com/news/spotlight-bjork/> (accessed July 3, 2021).
- 22) ジミ・ヘンドリックスの代表曲の一つが「紫のけむり」（“Purple Haze”）である。筆者がまだ学生であった1970年代に、友人の一人から「アムステルダムでマリファナのけむりを肺の奥まで深く吸い込んだら、しばらくして周囲が紫色に見えてきた」という話を聞いたことがある。
- 23) ビョーク『ヴォルタ』（2007年、ユニバーサルミュージック、UICP-1083）。筆者所有。
- 24) Wikipedia, “Declare Independence.” https://en.wikipedia.org/wiki/Declare_Independence (accessed July 10, 2021).
- 25) 英文歌詞はGenius.comによる。<https://genius.com/Bjork-declare-independence-lyrics> (accessed July 10, 2021). 和訳は筆者による。
- 26) 注24)
- 27) Wikipedia, “Björk.” <https://en.wikipedia.org/wiki/Björk> (accessed July 4, 2021).
- 28) 注4)
- 29) “Björk Wants to Investigate Magma Energy Deal,” *Iceland Review*, July 20, 2010. <https://www.icelandreview.com/news/bjork-wants-investigate-magma-energy-deal/> (accessed January 2, 2022).
- 30) “It’s Official Now: Magma Purchase Was Legal.” *Reykjavik Grapevine*, September 20, 2010. <https://grapevine.is/news/2010/09/20/magma-purchase-was-legal/> (accessed January 3, 2022).
- 31) 2009年4月のアイスランド政治史上初めての左派＝中道左派連立政権の誕生は、2008年9月のアメリカの投資銀行リーマン・ブラザーズ・ホールディングスの経営破綻が引き起こした世界的な金融危機から大打撃を被ったアイスランド経済の壊滅的状况に起因するものである。その辺りの事情について、筆者は別稿で取り上げている（浜口 2019: 46–47. 参照）。
- 32) Dirty Projectors + Björk, *Mount Wittenberg Orca*, 2011, Domino Recording, DNO 302. 筆者所有。

- 33) Wikipedia, “Mount Wittenberg Orca.” https://en.wikipedia.org/wiki/Mount_Wittenberg_Orca (accessed July 10, 2021).
- 34) CD (注 32) 所収のライナーノーツによる。
- 35) 英文歌詞は CD (注 32) 所収のライナーノーツ、和訳は筆者による。
- 36) 注 33)
- 37) トモ・スズキ・ジャパン (2020 年 2 月 26 日) 「【開催延期】 マシユー・バーニー 『リダウト』 プラス」 <https://www.tomosuzuki.com/post/redoubtplus> (2022 年 1 月 29 日閲覧)。
- 38) 注 11)
- 39) 筆者は 2022 年 8 月 3 日に本特別展を鑑賞した。会場内では、『拘束のドロイング 9』のステール写真 7 点、同映画関連のバーニーの造形作品 2 点の計 9 点が展示されていた。また 2 面のモニターにおいて『拘束のドロイング 9』が上映されていたので、会場内係員に確認したところ、全編 (2 時間 15 分) を繰り返し上映しているとのことであった。
- 40) トモ・スズキ・ジャパン 「【速報】 マシユー・バーニー 『拘束のドロイング 9』、9/10 (土) 金沢 21 世紀美術館シアター 21 で 1 日限りの特別上映!」 <https://www.tomosuzuki.com/post/dr9kanazawa> (2022 年 9 月 11 日閲覧)。
- 41) SMASH corporation, “björk japan 2023.” <https://smash-jpn.com/bjork2023> (accessed August 28, 2022).
- 42) 共同船舶株式会社 (2021 年 12 月 21 日) 「山口県下関市での新母船建造を内定」 <http://www.kyodosenpaku.co.jp/news/2021/12/> (2022 年 2 月 22 日閲覧)。
- 43) 注 42)

文献

Andersen, Anna

- (2010) “Team Björk Tries To Freeze Magna Energy.” *Reykjavik Grapevine*, November 5, 2010. <https://grapevine.is/mag/articles/2010/11/05/team-bjork-tries-to-freeze-magma-energy/> (accessed January 3, 2022).

浅井隆・田中有紀・加藤有花・Alexander Lee [編]

- (2005) *Matthew Barney Drawing Restraint Vol II*. 東京：アップリンク。

チェン、ドミニク

- (2005) 「マシユー・バーニー・インタビュー—成長から恋愛へ／関係性のドロイング—」『美術手帖』57(8)：47–53. [2005 年 8 月号]

Čirić, Jelena

- (2021) “Björk’s Harpa Concert Series Supports Women’s Shelter.” *Iceland Review*, October 12, 2021. <https://www.icelandreview.com/culture/bjorks-harpa-concert-series-supports-womens-shelter/> (accessed January 29, 2022).

Guðbrandsdóttir, Kristjana Björg

- (2016) “Exclusive interview with Björk: The pain was a journey.” *Iceland Magazine*, December 10, 2016. <https://icelandmag.is/article/exclusive-interview-bjork-pain-was-a-journey> (accessed December 24, 2021).

浜口 尚

- (2016) 『先住民生存捕鯨の文化人類学的研究—国際捕鯨委員会の議論とカリブ海ベクウェイ島の事例を中心に—』東京：岩田書院。
- (2019) 「アイスランドにおけるナガスクジラ捕鯨、ミンククジラ捕鯨の現況と課題」岸上伸啓 [編] 『世界の捕鯨文化—現状・歴史・地域性—』(国立民族学博物館調査報告 149) 大阪：国立民族学博物館、33–54 頁。
- (2021) 「ロックと反捕鯨運動」『園田学園女子大学論文集』55: 149–178.

Hamaguchi, Hisashi

(2021) “The Rise and Fall of Fin and Minke Whaling in Iceland, with Special Reference to the 2018 and 2019 Whaling Seasons.” In Nobuhiro Kishigami (ed.) *World Whaling: Historical and Contemporary Studies* (Senri Ethnological Studies 104), Osaka: National Museum of Ethnology, pp.33–52.

長谷川祐子

(2005a) 「再生されつづける未来—拘束と創造のファンタジー—」『美術手帖』57(8)：34–42。[2005年8月号]

(2005b) 「アスリートはアーティストである—天空のニジンスキー、バーニー—」『Studio Voice』356: 42–43。[2005年8月号]

(2005c) 「プロダクション・ノート—『拘束のドローイング9』撮影日誌—」『SWITCH』23(8)：66–67。[2005年8月号]

(2013) 『キュレーション—知と感性を揺さぶる力—』（集英社新書 0680 F）東京：集英社。

猪野 辰

(2005) 「インタビュー マシュー・バーニー—破壊なくして創造は生まれない—」『SWITCH』23(8)：28–30。[2005年8月号]

猪野 辰・伴野由里子

(2005) 「スタッフ・インタビュー」『SWITCH』23(8)：62–65。[2005年8月号]

石井 敦

(2011) 「捕鯨問題の『見取り図』」石井 敦 [編著] 『解体新書「捕鯨論争」』東京：新評論、3–63頁。

石川 創

(2011) 『クジラは海の資源か神獣か』（NHK ブックス 1172）東京：NHK 出版。

石川真一・石田昌隆・北中正和・真保みゆき・原雅明・渡辺健吾・渡辺亨・斉木小太郎

(2007) 「Björk オリジナル・アルバム・ガイド」『ミュージック・マガジン』39(5)：40–45。[2007年5月号]

金子晋一

(2004) 「ビョーク・グズムンスドットイルとジョン・ケージ 《ヴェスパタイン》と《4'33'》を聴く—」『尚美学園大学芸術情報学部紀要』4: 15–31。

Kanter, James

(2008) “Björk Wages Battle Against Icelandic Aluminum.” <https://archive.nytimes.com/green.blogs.nytimes.com/2008/11/13/bjork-wages-battle-against-icelandic-aluminum/> (accessed September 9, 2022).

小島敏男

(2003) 『調査捕鯨母船 日新丸よみがえる—火災から生還、南極海へ—』東京：成山堂書店。

小窪千早

(2008) 「コンボ独立宣言とその影響」（2008年3月13日）東京：日本国際問題研究所。 <https://www.jiia.or.jp/column/column-154.html>（2022年9月9日閲覧）。

Kyzer, Larissa

(2022) “Björk Announces New Album: Fossora.” *Iceland Review*, August 20, 2022. <https://www.icelandreview.com/culture/bjork-announces-new-album-fossora/> (accessed August 20, 2022).

前田愛実

(2005) 「マシュー・バーニー・インタビュー」『Studio Voice』356: 46–49。[2005年8月号]

Magnússon, Haukur S.

(2009) “A Conversation With Björk.” *Reykjavik Grapevine*, July 20, 2009. <https://grapevine.is/icelandic-culture/music/2009/07/20/music-interview-a-conversation-with-bjork/> (accessed December 25, 2021).

(2010) “Grand Old Aunt Björk.” *Reykjavik Grapevine*, July 30, 2010. <https://grapevine.is/mag/articles/2010/07/30/bjork-feature/> (accessed December 25, 2021).

(2011) “Magma Sells 25% Of HS Orka To Icelandic Pension Funds.” *Reykjavik Grapevine*, April 18, 2011.

- <https://grapevine.is/news/2011/04/18/magma-sells-shares-to-pension-funds/> (accessed January 3, 2022).
- Martin, Andrew
(2006) “Björk Gets Restrained.” *Columbia Daily Spectator*, March 24, 2006. <https://www.columbiaspectator.com/2006/03/24/bjork-gets-restrained/> (accessed July 5, 2021).
- McDonnell, Evelyn
(2001) *Army of She: Icelandic, Iconoclastic, Irrepressible Björk*. New York: AtRandom.com Books.
- McNair, James
(2008) “The ice maiden: entering her forties hasn’t stopped Björk continuing to court controversy.” *The Independent*, April 11, 2008. <https://www.independent.co.uk/arts-entertainment/music/music-magazine/music-magazine-features/the-ice-maiden-entering-her-forties-hasn-t-stopped-bjork-continuing-to-court-controversy-807379.html> (accessed December 25, 2021).
- 三島由紀夫
(2020) 『太陽と鉄・私の遍歴時代』（中公文庫）東京：中央公論新社。[『太陽と鉄』初版、1968年]
- 行川和彦
(2007) 『パンク・ロック／ハードコア史』東京：リットーミュージック。
- 野々村文宏
(2008) 「生氣論と機械論の対立を超えて—マシュー・バーニー『拘束のドローイング No.9』に見る非定型な造型とカー」『東西南北』（和光大学総合文化研究所年報）2008: 150–156.
- 大鷹俊一
(2016) 「すべてはセックス・ピストルズからはじまった」大鷹俊一 [編] 『パンク・レヴォリューション』東京：河出書房新社、20–29頁。
- 小野島大
(2017) 「ビョーク・インタビュー」『ミュージック・マガジン』49(11)：33–39。[2017年11月号]
- Ravens, Chal
(2022) “I got really grounded and loved it: how grief, going home and gabber built Björk’s new album.” <https://www.theguardian.com/music/2022/aug/19/i-got-really-grounded-and-loved-it-how-grief-going-home-and-gabber-built-bjorks-new-album> (accessed August 19, 2022).
- 坂本哲哉
(2017) 「近年のビョークの音楽的変遷」『ミュージック・マガジン』49(11)：40–43。[2017年11月号]
- Sharkey, Alix
(1995) “Björk — Ice Queen or Imp?” *Arena*, March 1995. <http://www.ebweb.at/ortner/tia/95/arena9503/arena9503.html> (accessed December 26, 2021).
- 清水敏男
(2002) 「『クレマスター』の封印を解く—マシュー・バーニーとの会話から—」『美術手帖』54(9)：45, 47, 49, 51, 53, 55, 57。[2002年9月号]
- 新谷洋子
(2002) 「ビョーク・ディスコグラフィ—」『ユリイカ』34(1)：179–189。[2002年1月号]
- 水産庁 (訳)
(1995) 『国際捕鯨取締条約』（冊子版）、東京：水産庁。
- 鈴木朋幸・舟越葉子
(2002) 「『クレマスター』の基礎知識」『美術手帖』54(9)：46, 48, 50, 52, 54, 56。[2002年9月号]
- 高橋美野梨
(2009) 「闘争の場としての捕鯨—規制帝国 EU とデンマーク／グリーンランド—」『国際政治経済学研究』24: 41–57.
- Udovitch, Mim

(1995) “Thoroughly Modern Björk: The Icelandic punk-turned-diva breaks out with ‘Post’.” *Rolling Stone*, July 13, 1995. <https://www.rollingstone.com/music/music-news/thoroughly-modern-bjork-194879/> (accessed January 28, 2022).

渡辺一枝 (2013) 『消されゆくチベット』 (集英社新書 0688 B) 東京：集英社。

[はまぐち ひさし 文化人類学]